

<随想>幽霊の足

著者	鈴木 和雄
雑誌名	日本文学誌要
巻	26
ページ	67-68
発行年	1982-07-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019338

幽霊の足

鈴木 和雄

夏というと、どういうわけか芝居でも寄席でも怪談ばなしを千編一律のごとおし出してくるし、また小説、読みものまで幽霊を盛んに酷使する。

もっとも最近では幽霊の品位がだいぶ変わって、

「一枚、二枚、三枚、四枚……」

「なんだい番町皿屋敷のお菊か」

「いいえ、ストリップ……」

などというのまで出て来て始末におえない。

「幽霊になぜ足がないのか」とふとそんなことを考えて、はじめのころは幽霊には足があったように何かに書いてあった記憶をよびおこした。

なにしろ素朴なかたちであった幽霊だからまだ人類にまで進化せず、いわゆる妖怪変化の類で、鵺（ぬえ）などというのやら天狗のようなものの百鬼夜行というわけで足のあるなしは度外視されていた。

だから源の頼光などという神経の図太い連中にかかるとひとたまりもなく退治されてしまう。

そこでこれではたよりにならぬと江戸時代の名匠といわれた画家円山応挙が遂に幽霊の足を切り落してしまった。したがってそれ以前に幽霊に足があったのか、なかったのか、明確な資料は見当らない。

応挙が足なしにしたモデルは一説によると、病気の妻女の姿からヒントを得たといわれているし、また講談などでは遊女の話が力説されているのだが、いずれにしても病人の青ざめた顔色、細くやせた手、寝巻姿の足もとのぼやけたところなどから幽霊の素材を見出したことなのであろう。

外国でも幽霊の出てくる作品は種々とある。ヘンリック・イプセンの「幽霊」という戯曲は幽霊の姿などどこにも出てこない。要するにオスワルド（主人公）の家の中が幽霊であって、建てたばかりの家が焼けたり、結婚しようと思った相手が親族であったりまことに陰惨な内容である。

シェイクスピアやチャーホフも幽霊を扱ってはいるがそれは亡霊やまたは形によらぬ音での表現である。英国製の幽霊は音だけきかせて肌に乗を立させるといふ話がある。

コトン、コトンと階段を登る足音がして、それが扉の前でぴたりと止る。誰か来たのかと扉を開けて見ると誰もいない。扉を閉めてしばらくするとまた足音がする。と、いうので音で幽霊の存在を示している。

中国の牡丹燈記も足音がする。この方は燈籠を持って歩くのだから姿を見せている。しかし足音はしても足元の方はよくわからない。幽霊というのはその出かたが非常にむずかしいようで、一つテンポを間違えると「ばけもののひっこむころに出て来た」という言葉通りになってしまう。

したがって幽霊は足など切り捨てて、顔によってその怨念を強調し、しかもふわりふわりと宙に浮いている感じが強く心に印象づけ、恐怖心を起こさせるのだと思う。

幽霊や妖怪を書いた書物は「今昔物語」をはじめとして、江戸時代の草子の類や戯作者鶴屋南北の作品などに種々と出ているが、いずれにしても応挙の足なし方式が採用され当時の江戸芝居が一つの方向を見出したといっても過言ではないであろう。

その味をしめてか、現在に至っても夏期になると怪談ものが芝居、映画、寄席、テレビに至るまで繰りかえし、むしかえし上演、上映される。

来る夏も、来る夏も、四谷怪談とか牡丹燈籠であり、小平次でなければ雪女であるというように、幽霊の方も席のあたたまる暇がないと恐れをなしていることであろう。

これは丁度十二月になると赤穂浪士ものが出てくるのとよく似ている。もっとも赤穂浪士の方は最近では十二月とは限らなくなったよ

うだが。

考えて見れば四谷怪談にしても牡丹燈籠にしても、読む方や見る方はなにも知らないのだから幽霊に足があるうがなろうがその作品の内容に引き込まれて同情心やら恐怖心が湧いてくるのであって、演劇では初代(?)尾上松緑が応挙描く幽霊の足のないのやひとだ、まからヒントを得て、足をなくし、すそをひとだまのように細く長くして演出効果を挙げたということである。

幽霊となつてなぜ出なければならぬのかという前提をよくわかるように読者なり見物人の心の中に植えつけることが先決で、これのむごい殺され方をしたという精神的なものを読者なり見物人なりの心に訴えることなので、足のあるなしなど問題ではない。

ある外国映画(題名は忘れた)で幽霊の出るシーンがあった。古い屋敷の二階で夜中になるとその家の何代目かの主人公が広間の一方の壁に現われ、片方の壁に消えるのである。これはその公卿家だかをのっ取ろうとする犯人が仕掛けたもので、捜査の結果映写機を見つけ出したのだが、この壁の幽霊(亡霊)も足がなかった感じだ。

幽霊に足があるか、ないかなどというのは別段足があったからといって、それから足がつくというわけでもなく、人間が考えた幽霊の姿として足のない方が何かと仕事がやり易い。要するに足のあるなしではなく、人間の心の中に巣くっているのが幽霊の本体で、それが柳の木の下になったり、井戸の中になったり、家の片隅になったりする。

まあ定説として、幽霊には足がないとして置いたほうが、無難のようである。

(一九三一年卒)